
まぶらほ～式森くんの受難～

ニット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぶらほ〜式森くんの受難〜

【Nコード】

N2957K

【作者名】

ニット

【あらすじ】

式森くんがいろいろと大変な事態に巻き込まれていく物語です。

3人娘が出てこないのでアホ小説です。

初めに

この小説は以前とあるサイトで書いていたものです。
サイト閉鎖に伴いこちらに移動しました。
少しずつ手直ししつつ投稿していく予定です。

（注意）

このまぶらほは限りなく壊れています。
キャラ的にも世界的にも。すべてが原作とかけ離れています。
そもそも三人娘がでていない時点でヘタレ小説です。

故に原作のイメージや雰囲気大切にしたい方は読まない事をお薦めいたします。

それでも読んでほしいぜよという方は楽しんで？読んでくださいますか

第01話 始まりは普通に

ピピピ・・・ピピピ・・・

「うーん・・・朝か・・・」

僕は目をこすりつつ布団から起き上がった。

僕の名前は式森和樹、私立葵学園に通う学生だ。

まあそんな自己紹介はさておき、枕もとに置いてある眼鏡をかけた。

別に眼が悪いってわけじゃない。その証拠によく見ればわかるけどこれには度が入っていないのだ。

この眼鏡は『魔眼殺し』と言って、僕の魔眼を封じているのだ。

そして、魔眼の名前は『魅了の魔眼』異性を引き付ける力があるのだ。

やたら強力な魔眼で、危ないからと親がどこからか貰ってきたこの『魔眼殺し』を常に付けている。

それでも完全に無力化できる訳ではないらしい。

それは、微々たるものだが人に影響をあたえているのだ。

とくに、長いこと一緒にいるとどんどん蓄積していくらしい。

家族である故にほぼ毎日顔をあわせている従姉妹や小さい頃からの幼なじみに襲われそうになったり、布団のなかに忍び込まれそうになったのは、一度や二度ではない。

だから、全寮制のこの学園に入学したのだ。
当然反対されたのだが、家にいると貞操の危機にあったので頑張って逃げてきたのだ。

しかし、どうやら神様はそうとう僕を困らせたいらしい。

数カ月前に何故かメイドの集団に拉致されたのだ。

どうやら、百五十人にも及ぶメイドの次期ご主人様になれとのことだ。

学生の身分でそんなことは出来ないと言って必死に断ったのだが、そこは戦うメイドさん。そうそう簡単には退いてくれなかった。

そして、なぜか気に入られてしまったメイド長のリーラさんに押し倒されて「既成事実を作れば留まっていただけますか？」と真顔で言われ、服を脱がされそうになったとき、必死の抵抗と説得により

- 1、卒業後にメイドたちのご主人様になること
- 2、毎週日曜に連絡をすること

以上二つを条件に元の生活に帰してもらった。

どうやら、この魔眼は悲しいことに女難も呼び寄せるらしい。

大なり小なりの女難に次ぐ女難で枕をぬらすこともよくある。

羨ましいと思うかもしれない。でも、それは大きな間違いなのだ。
眼を血走らせ、襲ってくる女性はかなり恐いのだ。

卒業したらどうなるんだろう。あんなたくさん女性がいるところに行ったら・・・

ガタガタと震え始める体を抱き締める。

いや、考えてはダメだ。そんなことより回避する方法を・・・ほうほう・・・ほ・・・ほ・・・ほ・・・悲しいほど見つからない。たまらず涙があふれる。

いや、今を精一杯生きようきつといいことが・・・ありますように。

まあ、それはさておき朝だ。

部屋のカーテンを開け、朝日を取り込む。

「ふう、いい天気だなあ」

外は快晴、こんな日は一日中日向で猫みたいに寝たいなーと考えるが今日はあいにくと平日だ。

なくなく学校に行く準備をすすめ、部屋を出て食堂に行くことにした。

第01話 始まりは普通に（後書き）

今回は式森くんの背景をかきました。

式森くんの従姉妹はオリジナル設定です。
設定が特殊？です。

第02話 朝は抱きしめて

私立葵学園は魔法を習う場所である。

魔術と魔術師の権利宣言によると、『人は生まれながらにして魔術師であり、魔法を使う権利において平等である』とのことだ。

しかし、その魔法回数は無限ではなく有限なのだ。個人差はあるが一般平均がだいたい、十数回である。

そして、魔法を使いきると体が塵になって消滅してしまうのだ。

僕が葵学園に入ろうと思ったのは先程も言った通り全寮制だからだ。僕は家族（主に従姉妹）から離れたいという理由だけでこの学園を受験したのだ。

しかし、葵学園はエリート校。

生徒の平均魔法使用回数が千五百強もある。

まさしくエリートが集まる学園なのだ。

それに比べ僕は生涯魔法使用回数が七回しかない。

つまり、あと七回魔法を使うと死んでしまうのだ。

では何故こんな僕がエリート学園に入れたかということ、魔眼の事も多少あるのだろうか、どうやら御先祖様達がすごいらしい。

映画にもなった某陰陽術師をはじめ、有名な魔術師達が教科書一冊分に達するほどまざっているらしい。

つまり、それらが凝縮された遺伝子の潜在能力が桁外れに強いらしい。

いのだ。

それと、一回分の魔法の威力も桁外れらしい。

何でも、一回使用するだけで世界のどこかで異変が起こるらしいのだ。

たとえば、死火山が大噴火するとか南極の氷がすべて溶けるだとか・

つてか、いまさらだけどかなり危ないな・・・

んで、先程からやたら『くらしい』を連発しているけどそれは、あかいほるあき 葵学園の養護教諭、紅尉晴明に説明されたからなのだ。

彼は年齢不詳で、あらゆる学問に精通しており、いくつもの学位をもにしているらしく、いろいろな研究機関が喉から手が出るほどほしい人材なのだそうだ。

それが、何を気に入ったか葵学園の保健室の先生をしている。

そんな先生から入学できた理由を教えてもらったのだ。

何故知っていたのか疑問に思ったけど気にしないことにした。

世の中には知らない方がいい事もあるのだ。

まあ、それはさておき朝食が終わったので、鞆をもち食堂をでる。さて、学園にいきますか。

「お早ようございます式森さん。」

寮を出ると管理人さんがいた。
名前は尋崎華怜^{ひろさきかれい}とても綺麗な女性でなぜかいつも喪服を着ている。
入寮したところからいろいろと僕を気に掛けてくれているこの寮の管理人さんだ。

「お早ようございます尋崎さん。今日はいいい天気ですね。」

竹ボウキ片手にあいさつをしてくれる尋崎さんにあいさつをかえす。

「はい、とてもいいお天気ですね……あら？式森さん髪の毛に何かついていますよ。」

「ええっ！？本当ですか!？」

あわてて髪についているものを取ろうとしたけどなかなか取れない。

「取ってあげますね。」

そう言つて、にこつと笑うと僕の方に近づいてきた。

「うう、すみません……」

うう、恥ずかしい……もっと鏡を見ておくんだつたと考えていたら、尋崎さんが「きゃっ」と言つて倒れかけてきた。

どうやら、つまずいたようだ。

とっさに僕は尋崎さんを抱きとめた。

「だ、大丈夫ですか？」

謀らずとも抱き締めるかたちになってしまった。
尋崎さんは思った以上に軽く、とてもいいにおいがした。

「あ、ありがとうございますね。式森さん。」

なんとというか、一日中ほしていた布団のようになつたかく、このまま眠ってしまいそうな心地よさだった。

「あ、あのっ！し、式森さん？」

管理人さんがちょっとどもりつつ話し掛けてくる。

「へっ？あ、あ、すいません尋崎さんっ！..」

バツ、と尋崎さんから離れる。どうやらずっと抱き締めていたらしい。その証拠に尋崎さんが顔を赤く染め、うつむいている。
怒っているのだろうか？

「す、すいませんっ！！何というか決してセクハラとかではなく尋崎さんを受けとめようとしていただけであり、なぜ抱き締め続けたのかはおいおいあきらかにしていくべきだと思っんですがいやでもどこか安心出来たのも真実でありもうちょっとしていたかったというのも・・・あれっ！？僕はなにを言ってるんだろっ？とっ、とにかく、すいませんっ！！」

顔を真っ赤にしつつ、ほぼワンプレスで言い放ちその場から逃げようよに・・・いや、事実逃げだした。

後ろの方で尋崎さんが何かを言っていた気がするが、気にしていらなかった。

そして、脱兎のごとく学園に向かって走って行ったのだった。

第02話 朝は抱きしめて（後書き）

尋崎華怜さんはアニメに出てくる人です

第03話 脅しは笑顔と

式森和樹は決して格好いい部類に入るわけではない。

どちらかというと可愛らしいという表現がしっくりとくるほうだ。

それは、あえて表すとしたら捨てられた子犬と言ったところであろうか。

どことなく母性本能をくすぐるその姿は・・・萌える。

現に机に突っ伏して頭を抱えながら悶えるその姿に女子生徒が熱い視線をそそいでいるのだが、それは公然の秘密だ。

式森和樹は悩んでいた。当然朝のことである。

「うう、尋崎さん怒ってるかな？」

むと、頭をかかえて考え込む。

「……………」

謝れば、許してくれるのかな？いや、でも・・・
うう、解らない・・・

「あら、式森くんどうしたの？」

ふと、目の前から声が聞こえてきた。

誰だろうと視線をあげるとそこにはクラスメートの杜崎沙弓もじさきさゆみさんがいた。

彼女は違う学校に行った僕の幼なじみの子と親友であつたらしく、入学した頃からよく話し掛けられ、今ではたまに昼食を一緒にする仲なのだ。

こういう時は一人で悩んでいてもしかたないよね。
杜崎さんに相談してみよう。

「あのさ、実は朝にね・・・」

朝のことを杜崎さんに全部話してみた。

「・・・って言うわけなんだけど、どうしたらいいかな？」

「……………」

「あれ？杜崎さん？」

「……………」

「……………」

なんでだろう。何か非常にいやな予感がする……

「……………へえ、朝からそんな事してたんだ」

ニコツと笑いながらの言葉に背中からいやな汗がブアッと出てきた。

え、笑顔なのに眼が笑っていない……

ふふふ、と笑う彼女に怯える式森。

彼女の背後から見えるオーラは見間違い……だよな……

恐怖で逃げることも出来ず、ガタガタとふるえて涙目+上目使いで

見上げる。

「うっ！！！！」

すると何故か杜崎さんが、突然顔を赤らめオーラが消えていく。

そのウルウルとした式森の目は、『雨のなか「拾ってください」
と書かれた段ボールの中にいる子犬の目』という表現の方がピツタ
リくると言えよう。

そんなことを無意識にやってしまうものだから、従姉妹たちや幼な
じみに襲われたりするのだが、式森は気が付かない。

あ、あれ？どうしたんだろ？

「も、杜崎さん？」

「ま、まあなんでもないわよ。とりあえず、管理人さんなんてほっ
ときなさいよ。」

顔を赤らめてそう言うてくる杜崎に式森はどうしたらいいのか本当
に分からなくなる。

「ほっとけて、そ、そんな・・・うう、本当にどうしよう・・・」
背後で「敵に塩を送る必要もないし・・・」と杜崎がため息とともに言っていたが式森は気付かなかった。

「ところで式森くん。今日は午後から魔力診断だけど、ちゃんと出るのよ。」

魔力診断とは、月一に行なわれる魔法回数を調べる検査だ。
しかし、生涯魔法使用回数が一桁しかない式森はどうしても受ける気になれなく、いつも逃げているのだ。

やっぱり今日もさぼろうかなと思う。

「いや、さぼ」「ちなみにさぼったら・・・解るわよね」「・・・ハイ、モチロナイキマスヨ？」

言い終わる前にすさまじい殺気とともに却下されてしまった。
そのことにハラリと涙を流したのは秘密だ。

いくら悩んでいたとしても時間は流れてしまう。

ホームルームが始まった。

「あれ？先生遅いな・・・」

いつもなら時間ピッタリにくるのに、もう五分過ぎたやっただ・・・
どうしたんだろう？

教室がだんだん騒がしくなってきた。すると、がらりと扉が開いた。

女性がゼーゼー言いながら転がるように入ってきた。

教室が静まり返る。

スリムな身体をした若い女性が入ってきたのだ。

スポーツをしているのかともしなやかである。

しかし、動作が乱暴で品がない。

髪の毛を背後で無造作に結んでいて、化粧つ気もない。

しかし、式森は小さく「綺麗な人だなあ」とつぶやいてしまった。

それを聞いていた女子生徒が入ってきた女性を睨んでいたりする。

若干一名、某拳法少女が式森を睨んでいだが式森は無論気が付かない。

誰だろうか？何だか息が切れてるみたいだけど・・・

しばらくすると、息が落ち着いてきたのを見計らって一人の女子生徒が話し掛けた。

「あの・・・どなたですか？」

すると、彼女は手を振り

「はい、注目。私が新しい担任教師『伊庭かおり』です」

と言った。

先生の話によると元担任が入院してしまい、代わりにきたらしい。

あとの残りのホームルーム時間は質問攻めにあっていた。まとめると

- ・生まれはハンガリー
- ・誕生日が五月五日
- ・趣味がゲーム

とのことだ。

ゲームの話ではやけに熱弁していた気がする。

知らないゲーム名がぽんぽん出てきた。

相当好きなのかな？

そうこうしている間にチャイムがなってしまった。

「はい、質問は以上。．．．ところで式森和樹っているか？」

「は、はいっ、僕ですけど．．．」

び、びっくりした．．．な、なんだろう？

「そうか、君か．．．ふっふっふ．．．顔は覚えた」

「????」

分けも分ならず首を傾げる。

その仕草にまた顔を赤らめる女子生徒がいる。

一瞬かおりも顔を赤らめたが、教室から出ていった。

「シキモリクン？」

後ろから誰かが話し掛けてきた。

「チョット、オハナシガアルンダケド・・・」

誰だろうかと、振り向くとそこには、デビルトリガーを弾いちゃい
そんな杜崎さんが立っていた。

漫画的表現だと背景に「ゴゴゴゴゴ」だろう。

「ひっ!」

思わず悲鳴をもらしてしまった。

悪魔っているんだね・・・

その後、伊庭先生について関係を聞かれた（尋問とも言う）。

さっき初対面したばかりなのに・・・

結局誤解（？）をとくのに休み時間がすべてつぶれてしまった・・・

うう・・・なんで、いつもこうなるんだろう？

僕は何もしてないのに・・・

その質問に答えてくれそうな人物は・・・残念ながら式森の回りにはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2957k/>

まぶらほ～式森くんの受難～

2010年10月11日00時38分発行